

Title	ナヴィ・ムンバイ商人の「ビジネス」の論理：「コスモポリタン」の再考にむけて
Author(s)	田口, 陽子
Citation	くにたち人類学研究, 5: 47-72
Issue Date	2010-05-01
Type	Journal Article
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10086/18564
Right	

<研究ノート>

ナヴィ・ムンバイ商人の「ビジネス」の論理 ——「コスモポリタン」の再考にむけて——

田口 陽子*

要旨

本稿は、インド、ナヴィ・ムンバイにおける、コスモポリタン都市と地域主義の関係性について考察することを目的とする。具体的には、商店街における新興極右政党による看板のマラーティー語化と、都市祭礼であるガネーシャ祭を事例とし、それらに対応する商人たちが用いる「ビジネス」の論理を検討する。先行研究では、商業都市ボンベイ(現ムンバイ)のコスモポリタニズムは地域主義の台頭によって衰退してきたと論じられてきた。しかし、そこでは現地の商人たちが用いる「コスモポリタン」概念についての検討は十分ではなかった。本稿では、地域主義的な現象に対し、商人たちがローカルな「コスモポリタン」概念に支えられた「ビジネス」の論理を用いて適応していく様子を明らかにしていく。

キーワード： インド、ムンバイ、コスモポリタン、ビジネス、商人

目次

- I はじめに
- II ナヴィ・ムンバイの商人世界
 - 1 調査地の概要
 - 2 カースト／コミュニティの重層性
- III MNS によるマラーティー語看板事件
 - 1 地域主義の台頭と MNS の設立
 - 2 看板事件への対応と MNS についての語り
 - 3 移民商人間の差異
- IV 都市祭礼を支えるもの：ガネーシャ祭を事例に
 - 1 ガネーシャ祭の概要
 - 2 祭礼の準備
 - 3 商人たちの寄付と参加
- V おわりに

* 一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程

I はじめに

本稿は、インド、ナヴィ・ムンバイにおける移民商人の「ビジネス」の論理に注目することで、現地における「コスモポリタン」概念を考察することを目的とする。

ボンベイ(現ムンバイ)¹は、さまざまな媒体によってコスモポリタン都市として描かれ、語られてきた。ボンベイの多様性や動態はしばしばニューヨークに喩えられ[e.g. Conlon 1995; Mehta 2004]、巨大な映画産業はハリウッドをもじったポリウッドの名で知られる。現在、近代的で豊かな「アメリカ」のイメージで表象されるボンベイは、さまざまな移民で形成されてきた都市である。そこには「異なる言語、宗教、カースト、親族構造、名前のつけ方、祭礼の暦(…)服装や料理の違いが、別々に、しかし近接して同時に存在」し、「精巧なモザイク」が織りなされているとされる[Thorner 1995: xiii]。

なかでも特徴的なのは「商業のコスモポリス」としての側面である。植民地期のボンベイの商人層には、カルカッタ(現コルカタ)と比べ、多様な「人種」、「民族」、「コミュニティ」が混合していたという[Markovits 2008]²。ボンベイでは、人々は金稼ぎに忙しく、争いあうことはもちろん隣近所と知り合う時間もないと語られる[Punwani 2003]。ボンベイで人びとを結びつけるのは「ビジネス」の名の下に展開される人間関係だ。アパドゥライは、古き良きボンベイを以下のように記述する。

第二次世界大戦後のボンベイは、まさに商業のコスモポリスだった。人々は「ビジネス」(英語起源のこの言葉は、職業、取引、交渉、そして商業的なすべてのエートスを示す)を介して出会い、「ビジネス」を介して居住地、民族、出身地などを横断するリンクを築き、再生産した。ボンベイでステレオタイプ化を免れたエスニシティはなく、すべてのステレオタイプはジョークになった。重要なのは、カネの色(What counted was the color of money)だった[Appadurai 2000: 631]³。

一方で、「ボンベイ＝コスモポリス」という発想は疑われてもいる。アパドゥライは、1970年代以降のボンベイがヒンドゥー至上主義と地域主義を掲げる極右政党の主導により暴力的にヒンドゥー化されてきた過程を、グローバル化やボンベイの脱工業化と関連づ

¹ ボンベイは1995年にムンバイに改名された。本稿では、改名以前について言及する場合と引用については「ボンベイ」、それ以外については「ムンバイ」と表記する。

² マルコヴィッツによると、カルカッタでは、商人層がほぼスコットランド人とマールワール人に占められ、両者の敵対関係と、インド人の排除が顕著だった。一方、ボンベイではイギリス人とインド人商人の関係はより平等で、インド人内部でも、パールシー(ゾロアスター教徒)、ヒンドゥー、ムスリム、ユダヤ教徒など多様なコミュニティの商人たちが活躍したという[Markovits 2008: 144-149]。

³ “The color of money(カネの色)”は、米ドル紙幣の緑色を意味する慣用表現である。ここでは「ビジネス」において、肌の色(人種、エスニシティ)にかかわらず、カネ、キャッシュが問題とされたことを意味している。

け「脱コスモポリタン化(decosmopolitanization)の歴史」[Appadurai 2000: 627]として論じている⁴。また、植民地期のコスモポリタニズムは、じつは限定的で排他的なエリートのコスモポリタニズムだったと反省的に振り返られてもいる[Patel 2003, Appadurai 2008]。しかし実際、ムンバイの街角では、「コスモポリタン」という言葉が今もエリートのみならずカフェの店主や小売店の商人などにも頻繁に使用されている。したがって、分析概念としてではなくローカルに流通する「コスモポリタン」概念を捉えることが重要だと考えられる。

コスモポリタンという用語については、特定の歴史にもとづく「相異なるコスモポリタニズム(discrepant cosmopolitanisms)」[Clifford 1997: 36]や、西洋哲学の文脈とは異なる、ローカルな、現に存在するコスモポリタニズムを捉えようという提案がなされてきた[Pollock et al. 2000]。本稿では、こうした議論の流れをくみつつも、ローカルな事例の中に普遍的なコスモポリタニズム的現象、あるいはコスモポリタンのひとつの型を見つけようとするものではない。むしろ、かならずしも実態にそぐわない「コスモポリタン」という概念が、人びとが現実を捉えるための道具としていかに用いられ、現実の生成にいかん作用しているのかを描くことを試みる。

さらに本稿は、コスモポリタニズムの喪失と関連づけられる地域主義について検討するためには、政治のみならず経済の領域、特に商人の世界に目を向ける必要があると主張する。グローバル化により加速した人やモノ、イメージの流れ(フロー)や変化は、同時に特定の文化やアイデンティティを構築し閉じていく対抗的な動きを生み出すものとして論じられてきた[Meyer and Geschiere 2003]。こうした議論に沿えば、ムンバイの現状も、グローバル化とそれに対抗するアイデンティティ・ポリティクスとしての地域主義の台頭の結果として論じることでもできるだろう。しかし、現地調査からみえてきた商人たちの実践は、かならずしも地域主義的な信条に裏付けられるものではなく、上記の議論では説明できない部分が残る。そこで、本稿では現地で頻繁に用いられる「ビジネス」という言葉に注目する。「ビジネス」という言葉には、商業活動に限らず、商人たちの生活において物事を円滑に進めるためのさまざまな工夫や実践が含まれる。結論からいうと、コスモポリタニズムの対抗軸として論じられてきた地域主義的現象についても、商人たちは「コスモポリタン」な価値に支えられた「ビジネス」の論理で応じていると考えられる。

本稿の構成は以下のとおりである。二章で調査地となるナヴィ・ムンバイの概要と重層的な「カースト」概念を記述し、三章でマハーラーシュトラ新生軍団 (Maharashtra

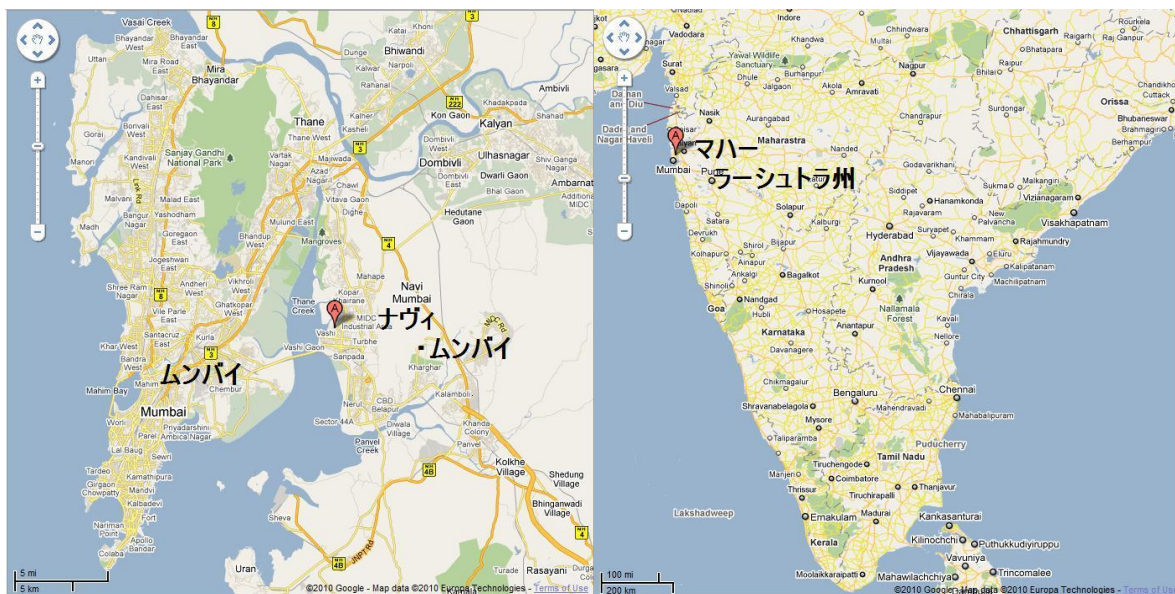
⁴ しかしアパドゥライは「脱コスモポリタン化」について論じた論文の最後で、現代ムンバイには「力強い市民的伝統(powerful civic traditions)」[cf. 田辺 2008]が今も根づいており、人びとは「コスモポリタンで、世俗的で、多文化なボンベイへの力強い想像力」を持ち続けていると強調し[Appadurai 2000: 650]、筆を置いている。彼のいう「コスモポリタン」には、ボンベイで生まれ育ったアパドゥライ自身が持つローカルな感覚と分析概念とが入り混じっているように読むことができ、示唆的である。

Navnirman Sena、MNS)による商業施設の看板のマラーティー語化事件と商店街の反応を記述する。四章では、商店街におけるガネーシャ祭に焦点をあてる。本稿で扱う事例は、排他的な地域主義の表出ともとれる現象であり、移民商人たちは自らが迫害や暴力の標的にされかねない立場だともいえる。こうした状況に商人たちがいかに適応しているのかを、商人たちが用いる「ビジネス」や「コスモポリタン」といったキーワードから検討する。

II ナヴィ・ムンバイの商人世界

1 調査地の概要

本稿のデータは、2009年7月25日～9月29日の計2ヶ月間に行なった現地調査⁵にもとづく。調査期間中は、インド、マハーラーシュトラ州、ナヴィ・ムンバイ、ヴァシ・ノードのインド人家庭⁶に滞在し、商店街を中心に調査を行った。ナヴィ・ムンバイ(マラーティー語で「新しいボンベイ」)は、ボンベイの過密問題を解消するためのツイン・シティとして考案され、ターナー小湾(Thane Creek)をはさんだインド亜大陸側に建設された[Sharma and Sita (eds.) 2001]。



©2010 Google · Map data ©2010 Europa Technologies [Google maps 2010]

図1：ムンバイ、ナヴィ・ムンバイとマハーラーシュトラ州周辺地図⁷

⁵ 本調査は一橋大学大学院社会学研究科「キャリアデザインの場合としての大学院—入口・中身・出口の一貫教育プログラム」若手研究者活動助成金の支援を受けた。本調査に先立つ2007年4月～2008年8月に、筆者はムンバイの現地企業に就業しており、本稿で述べる看板事件やガネーシャ祭を都市の一住人として経験していた。2009年調査当時の為替レートは1ルピー=約1.9円である。

⁶ 滞在先は、ムンバイ市出身のバラモンの3人家族(父、母、娘)。夫の母語はコーンカニー語、妻と娘の母語はマラーティー語、家庭での使用言語はマラーティー語と英語である。

⁷ カタカナ地名は筆者記入。左地図ポイントはヴァシ、右地図ポイントはムンバイ。

ナヴィ・ムンバイは、ノードと呼ばれる複数の独立した街区を中心に構成されており、各ノード内部はそれぞれ単一の機能(商業、住宅など)を持つセクターに分かれる。CIDCO⁸[2005]によるナヴィ・ムンバイの全ノードにおける世帯調査⁹によると、住民の平均居住年数は約10年であり、約半数(48%)はムンバイ市部からの移住者である。ノード街区の住民はマハーラーシュトラ州出身、マラーティー語話者のヒンドゥーが多数派を占める¹⁰。ヴァシ・ノードは、ターネー小湾の橋を渡り、ムンバイ市部へ電車で約1時間と交通の便がよいこともあり、ナヴィ・ムンバイで最も発展したノードである¹¹。近年、駅前や大通り沿いに映画館やレストランなどを供えた大型ショッピング・モールが次々と建設され、急速に開発が進んでいる。

調査地の商店街¹²の店主と従業員の出身地は、ラージャスターン州が最も多く(23%)、ついでムンバイ市部¹³19%、グジャラート州15%、ウツタル・プラデーシュ(以下、UP)州13%の順となる。宗教は、ヒンドゥー教徒68%、ジャイナ教徒とヒンドゥー・ジェイン¹⁴16%、イスラーム教徒12%である。上述したマハーラーシュトラ人が多数を占めるナヴィ・ムンバイの平均と比較すると、商人たちの属性の多様性がわかる。

ムンバイでは場面ごとに言語を使い分けることが一般的なため、状況ごとの使用言語を示しておく。まず、家庭での話し言葉には総計16言語が挙げられ、最多がヒンディー語34%、次にマールワール¹⁵語23%、グジャラート語21%、マラーティー語14%、ボージプーリー語6%、英語6%と続く。一方、客との会話では、大多数(95%)の商人がヒンディー語を用い、約半数がマラーティー語(46%)、3分の1(33%)が英語でも対応する。このよう

⁸ CIDCO (The City and Industrial Development Corporation of Maharashtra Ltd.)は、1970年にマハーラーシュトラ政府が設立したナヴィ・ムンバイの開発主体である。

⁹ なお、この調査は開発されたノードのみを対象としており、都市建設以前にあった村や、近年拡大しているスラムの数値は反映されていない。

¹⁰ ノード住民の66%がマハーラーシュトラ州出身で、北インド出身者が14%、南インド出身者が11%。62%の人々の母語がマラーティー語で、次にヒンディー語13%、南インド諸語9%、北インド諸語7%、グジャラート語4%。宗教は、ヒンドゥー教徒90%、イスラーム教徒4%、キリスト教徒3%、新仏教徒2%でその他1%にシク教徒やジャイナ教徒が含まれる。

¹¹ ヴァシはムンバイ市の通勤通学範囲内で、都市機能としてはムンバイの一部と考えられる。
¹² 本調査では、ヴァシの商店街の2区画における店舗を訪問し、質問項目に沿って店主や従業員におもにヒンディー語と英語で話を聞き、筆者と助手(マハーラーシュトラ人)がデータを記入した。データの総数は59店舗135名で、店主・従業員の9割が男性である。店舗の内訳は以下のとおり(括弧内店舗数):衣服/服飾素材/テイラー(12)、電化製品(6)、宝石/ジュエリー(5)、家具/家庭用品(5)、ギフト/文房具/雑貨(4)、携帯電話(4)、化粧品/小物(3)、洗濯屋(3)、理容/美容室(3)、食料品(3)、時計/時計修理(2)、車用品、かばん、くじ、八百屋、材木、薬局、建設コンサルタント、旅行代理店、歯医者それぞれ1店舗。なお、小売店については取扱商品で分類している。

¹³ 旧ボンベイ島と北部郊外を含むグレーター・ムンバイを指しナヴィ・ムンバイは含まない。

¹⁴ ヒンドゥー・ジェインとは、自らをヒンドゥーであり、カーストがジャイン(Jain)であると答えた人びとである。

¹⁵ マールワール(旧ジョードプル藩主王国一体、現ラージャスターン)地方の言葉。調査地では、ラージャスターン語と同義で用いられていた。

に商店街の店主や従業員の母語は多様であるが、接客上はヒンディー語がおもな共通語となっている。以上の言語状況が次節で検討する看板マラーティー語化の背景である。

従業員の採用は親族や同郷者のつてを利用することが一般的である。地方の農村から出てきた一世代目の人口が多く、父親の仕事が農業であると答えたのは、店主が 22%、従業員では 49%にもなる。地縁や血縁以外でも、ムンバイでの出会いや他の従業員の紹介などの雇用関係がみられるが、求人広告などを利用した採用活動はほとんどなかった。

2 カースト／コミュニティの重層性

これまでみてきたように、ナヴィ・ムンバイの商店街は比較的新規の移民で構成されている。そこでは、多様なカテゴリーが入り混じって「カースト」概念を形成している。ムンバイの日常生活で使われる「カースト(caste)」という言葉は、もともと外来語¹⁶である。しかし、植民地時代以降さまざまな意味内容が取り込まれ、現在はサンスクリット概念であるヴァルナ(varna)やジャーティ(jati)¹⁷などに還元できないローカル概念となっている¹⁸。ムンバイでは、ヴァルナ、ジャーティ、出身地もしくは言語を同じくする集団(グジャラーティー、マールワリーなど)の他、ムスリムなどの他宗教、バイヤー(bhaiyya/北インド出身者¹⁹)、菜食主義者なども「カースト」として語られる。

他方で、指定カースト(SC)やその他の後進諸階級(OBC)など、政府による留保制度²⁰の枠組みも「カースト」を構成している。たとえば、学校や役所で書類に個人情報を入力する際、留保制度の対象となるカースト以外は、個別のカースト名を申告しなくてもよいことになっている。今回、筆者の滞在を引き受けてくれたヴァシの友人が、私立大学の期末試験の際に提出した用紙(英語)には、以下の項目があった。

¹⁶ ポルトガル語で「血筋・人種・種を意味し、ラテン語のカストゥース castus(混ざってはならないもの、純血)に起源をもつ」[藤井 2007:1]。

¹⁷ ヴァルナは「色」を意味し、ヴェーダ文献などに記されている象徴的概念で、バラモン、クシャトリア、ヴァイシャ、シュードラからなる。一方ジャーティは「生まれ」を意味し、内婚集団として機能する職業集団を指す[デュモン 2001、藤井 2007、Bayly 1999]。

¹⁸ 藤井によると、カーストの意味内容には「家系血統・親族組織・職能集団・商家同属集団・同業者集団・隣保組織・友愛サークル・応答・宗教集団・宗派集団・派閥など、密接にかかわってはいるものの、場合によっては相反し、ときに無関係な多様な現象が取り込まれていった」[藤井 2007:4]。ベイリーは、カーストをインド社会の本質として捉えたデュモンの浄・不浄にもとづく構造主義的説明やそれに対する批判をふまえたうえで、カーストはコードや価値の静的な反映ではなく、かといって単なるディスコースやオリエンタリズム的想像の産物でもないと主張し、人びとによるカースト認識や行動分析のダイナミズムと多様性を捉えることが重要だと述べる[Bayly 1999]。本稿ではこれらの議論に従い、ナヴィ・ムンバイで認識され、実践されるカースト概念について検討する。

¹⁹ Bhaiyya は、兄弟の意味で、北インドでは男性への呼びかけに使われる言葉だが、ムンバイではおもに北インド出身の男性を指し、蔑視的な呼称として使われることが多い。

²⁰ 留保制度とは、「社会経済的に<後進>とみなされ、なおかつ特定のカテゴリーに属する人びとを対象に、高等教育入学許可数、公的雇用、議席数などを一定比率で優先する制度」である[押川 1992:776]。

独立後も国民会議派支配が続いた。独立時、ボンベイはボンベイ州の州都となり、おもに比較的豊かな商人たちの言語であるグジャラート語話者と、低所得層労働者の言語であったマラーティー語話者が二大言語勢力を形成していた。その後全国的な言語単位の州編成の動きにともない、グジャラート語とマラーティー語それぞれの州を作る運動が活発化する。1956年、ボンベイ州は近隣州からマラーティー語地域を編入し、カンナダ語地域をカルナータカ州に分譲した。そして1960年、グジャラート州を分離し、ボンベイ市はマハーラーシュトラ州に帰属することになった [応地 1992, Patel 2003]。一方ボンベイ中心部では、主要産業であった綿工業の衰退と労働組合の弱体化により、労働者層であったマハーラーシュトラ人は職を失い不安定な状態に置かれていた。1966年、新聞漫画家であったパール・タークレーが、新政党シヴ・セナー(シヴァージ²²の軍隊)を設立した。シヴ・セナーは、不安定な低所得層労働者や失業者となったマハーラーシュトラ人を「大地の息子たち(sons-of-the-soil)」と呼び、彼らの復権と雇用拡大を政策に掲げた。シヴ・セナーは、共産主義者(労働組合)や南インド人、ダリット(不可触民)など場当たりに規定した「他者」を攻撃対象とし、マハーラーシュトラ人の支持を広げた。1980年代後半、シヴ・セナーは「ヒンドゥットワ(Hindutva)²³」を採用し、反ムスリム的な傾向を強めた。1992年、アヨーディヤ事件²⁴の影響を受けたボンベイ暴動においては、シヴ・セナーはムスリム襲撃を組織的にサポートしたとされる [竹中 2001, Lele 1996, Patel 2003]。1995年、シヴ・セナーはマハーラーシュトラ州においてインド人民党(以下、BJP)との連立政権を樹立し、州都ボンベイの都市名を「現地語」であるマラーティー語のムンバイに変更した。駅や空港、通りに使われていたイギリス風の名前は、次々にヒンドゥー、マラーティー的な名前に変えられた。シヴ・セナーとBJPの連立政権は1999年に国民会議派を中心とする連立政権に敗れるが、シヴ・セナー系列の影響力はいまだ失われていない。

シヴ・セナーがヒンドゥー・ナショナリスト的な政策を採用した一方で、2006年には、シヴ・セナーの創始者、パール・タークレーの甥であるラージ・タークレーがシヴ・セナーを離党しマハーラーシュトラ新生軍団(以下、MNS)を設立した。MNSは、初期のシヴ・セナーが掲げたマハーラーシュトラ人中心政策を引継ぎ、マハーラーシュトラ人

²² シヴァージ(Shivāji, 1627-80)は、「デカン地方を中心とするマラーター王国の創始者」で、ムガル朝と勇敢に戦ったとされる英雄である。「後世もマハーラーシュトラの英雄として、19世紀末の反英民族運動において人びとの精神的支柱となる」 [内藤 1992]。

²³ 「ヒンドゥー性」とも訳されるこの言葉は、インド人民党(BJP)など全国展開するヒンドゥー・ナショナリスト政党のイデオロギーであり、ヒンドゥーの人びととインド国家を重ね合わせるアイデンティティ・ポリティクスだといえる。

²⁴ 北インドのアヨーディヤは、『ラーマヤナ』の主人公ラーム生誕の地とされ、その地に1528年に建設されたモスクはヒンドゥー寺院を破壊して建てられたものと伝わっていた。1992年、暴徒化したヒンドゥー・ナショナリストらがモスクを破壊したアヨーディヤ事件を発端に、全国で暴動が発生、数千人以上の死者を出した [中島 2005:106-125]。

の雇用確保を名目に、州外(おもに北インド)からの移民迫害運動を展開している。

2008 年には、MNS が、売名パフォーマンスともいわれる過激な事件を引き起こした。以下、新聞報道を中心に事件を整理する²⁵。まず同年 2 月、MNS 党首ラージ・タークレーは、ヒンディー語映画界切っ手の大物、アミタブ・バッチャンを標的とし、バッチャンがムンバイで成功を収め富を築いたにもかかわらず、自身の出身地である北インド(UP 州)に学校を設立したり、何かにつけて北インドを優先していると攻撃した。数日間のうちに、アミタブの妻であり SP(社会党)議員のジャヤ・バッチャンによる反対意見表明、ムンバイ中心部での MNS と SP の活動家による乱闘、さらには北インド人の露天商やタクシー運転手への暴行にまで事態は展開し、マスコミの注目を集めた。その後、北インド人に対する暴動はマハーラーシュトラ州に拡大し、とくに深刻な被害を受けたプネーやナシックなどの都市では、数万人にもおよぶ北インド移民が故郷へと「大脱出(maha exodus)」する事態となった。同月、これらを受けてタークレーは暴動扇動容疑で逮捕されるが、即日保釈される。8 月、MNS はそれまでムンバイで共通語として機能していた商店街の英語看板をマラーティー語に書き換えるよう圧力をかけた。タークレーが二度目に逮捕された 10 月には、彼の釈放を求めた MNS 活動家たちによる暴動が発生し、北インド人に対する暴力も再度加熱した。タークレー本人は暴動扇動などの容疑を否認している。こうしたなか、都市の商人たちがいかに対処していったのか、次節で考察する。

2 看板事件への対応と MNS についての語り

本節では、2008 年 8 月の看板マラーティー語化事件に焦点をあてる。MNS は一定のフォント数以上のマラーティー語で書かれた看板を掲げなければならないという命令を独自に発表し、商店に対して脅迫的に実行を迫った。これに対し、当時のナヴィ・ムンバイでは大きな反発や目立った抗争は見られず、英語の看板を掲げていたほぼすべての店舗が要求に従った。

MNS の看板事件から 1 年が経過したヴァシでは、当時違和感があったデーヴァナーガリー文字の看板もすでに街になじんでいた²⁶。また、事件時にはデーヴァナーガリー文字に変えたものの、現在はまた英語のみの看板を使用している店舗も見られた。本件への対応策として、デーヴァナーガリーと英語両方の看板を掲げている店が一番多く、現状は表 1 のとおりである。

表 1：2009 年の看板使用言語

²⁵ 本論で取り上げた諸事件の記事は、論文末の参照ウェブサイトにもリストした。

²⁶ この問題を調査するきっかけは、事件当時ヴァシに住んでいた筆者が、見慣れた商店街に突然デーヴァナーガリー文字が溢れ、街の風景が大きく変化したことに衝撃を受けたことだ。なお、デーヴァナーガリー文字は、ヒンディー語、マラーティー語などサンスクリット語系インド諸言語の表記に用いられる。

言語（表記）	デーヴァナーガリーのみ	アルファベットのみ	両方
店舗数（計 55）	7	9	39
55 店舗内の百分率	13%	16%	71%

当時の対応を、大まかに以下の 4 つに分けることができる。1) 全く新しい看板を作った、2) もともとあった看板に文字を付け足した（つけ足し）、3) 看板の上からプラスチックのバナーなどを張って対応した（簡易看板）、4) すでにデーヴァナーガリー文字の看板を使用していたため、対応の必要なし。表 2 に示しているように、当時看板にデーヴァナーガリー文字の記載がなかった 7 割弱の店舗は、すべて何らかの対応を行なったことになる。

表 2：2008 年当時の対応

当時の対応 (2008 年 8 月以前に 看板を掲げていた 店)	新しい看板	つけ足し	簡易看板	すでにデーヴァ ナーガリー記載 (以前の看板をそ のまま使用)	合計
店舗数（計 46）	13	13	5	15	46
46 店舗内の百分率	28%	28%	11%	33%	100%

以上、看板の使用言語問題に対して、商店街の人々が表面上は MNS の要求に従っていたことがわかった。さらに、この政策に反対か賛成かと聞くと、「賛成」と答える人が多かった。しかし、その理由を語ってもらうと、マハーラーシュトラ州における移民商人たちの微妙な立場が浮かびあがる。以下に、商人たちの語りを詳しくみていきたい。なお、これらの語りは、人びとが店頭で見ず知らずの筆者に語った表向きの語りだといえる。しかし、ここでは彼らの「本心」を問わず、表向きの語りを分析することで、商店街の雰囲気、ひいてはそこで働く論理を検討したい。

まずは、周囲の反応に従ったと答えた人々の声をまとめたものを紹介する。なお、下線を引いた箇所は、後の分析で注目したい部分である。

1) 服飾素材店（女性、マハーラーシュトラ州ムンバイ市、ヒンドゥー、パンジャービー、ヒンディー語²⁷）

みんなが変えたから、もちろんうちも変えた。何でたかが 200 ルピー(看板付け替え費用)のために、争わないといけないの。そんな揉め事には意味がない。英語はみんなが

²⁷ カッコ内は、(性別、出身地、宗教、「カースト」、使用言語)を記載。「カースト」については、言語やジャーティ、出身地などが組み合わせあった場合もあるが、当該者が筆者に告げた「カースト」をそのまま使用した。以下の店主の語りについても同様。

わかるわけじゃないけど、ヒンディー語だったらみんな読める。だからヒンディー語のほうがいい。(筆者：「ではどうしてはじめは英語の看板だったのか?」)前はみんな英語だったし、誰も気にしなかった。マラーティー語は必須じゃなかった。だから、最初に看板を作ったときも、とくに言語の指定はしなかったら、(業者から)英語の看板がきた。

2) 美容室 (女性、タミル・ナドゥ州、ヒンドゥー、ナダール、英語)

夫に相談したら、たいした問題じゃないから小さくマラーティー語をつけておくようにいわれて、そうした。英語はみんな読めるでしょ。でも、マラーティー語はみんなが読めるわけじゃないし、私自身も読めない。だからって、私たちに何ができるの? どうしようもない。そういうことよ。

次に、MNS の政策に反対する意見を語り、それでも看板にマラーティー語を記載した人びとの事例を紹介したい。

3) 旅行会社 (男性、グジャラート州、ヒンドゥー、グジャラーティー、英語)

この事件は完全にばかげているとしかいいようがない。でも、マハーラーシュトラへの、ひいてはインドへの尊敬から従った。自分たちはグジャラートから来てマハーラーシュトラで仕事をしている。人を尊敬したら自分も尊敬されるものだ。旅行代理店はみんなに好かれることが大事なので、マラーティー語を記載した。インドは自由な国なので、MNS やシヴ・セナーもいいたいことをいう権利がある。MNS の脅しが原因で看板を変えた。

4) テイラー (女性、マハーラーシュトラ州ムンバイ市、シク、パンジャービー、ヒンディー語)

MNS の考え方は間違っている。前のまま、英語のままでよかった。ボンベイにはいろんなカーストがいる。マラーティーやパンジャービー、ラージャスターニーにムスリム。けど私たちはみんなヒンドゥースターニー(インド人)でしょう。マラーティー語で看板を書けというのはおかしい。パンジャーブ州もラージャスターン州も、そんな政策は掲げていない。MNS にはとくに脅しを受けたわけじゃないけど、あとで店を壊されたりしたら困るから従った。MNS が来たのは一回だけで、その後は何も問題ない。

5) ギフト店 (女性、マハーラーシュトラ州ターナー、カトリック²⁸、コーンカニー・マンガローリー、英語)

ボンベイはコスモポリタン。完全なコスモポリタンなのよ。ここでは80%の人が英語を読める。でも、あなただけマラーティー語は読めないでしょ？マラーティー語はみんなが読めるわけじゃない。でも、どっちにしても有名な店になったら看板なんて関係なくお客は集まる。だから、マラーティー語のシンボルを看板につけることくらい、たいした問題じゃない。私の店の看板にはスペースがあったし。だから英語と同じ大きさにマラーティー語でも店名を書いた。

ターナーで育って、マラーティー語は完璧に話せるけど、強制されたら話す気がしない。ここでは、マドラス人(Madrasi)、ムスリム、クリスチャン、菜食者(veg)、非菜食者(non-veg)、バイヤーがみんな一緒に住んでいて、何の問題もない。政治家は問題のないところに問題を作りだしている。(・・・)ボンベイの人はみんなビジネスに忙しく、帰ったら疲れて寝るだけ。政治のことを考える時間も、行動を起こす気力もない。

その他、不満の声としては、直接的に政治を批判するものよりは「看板のデザインが悪くなる」、「看板代に余計な出費がかさんだ」などが多かった。

最後に、事件発生以前からデーヴァナーガリー文字で記載していた例をみてみよう。

6) 衣料品店 (男性、デリー出身、ヒンドゥー、マールワリー、英語)

15年前から今と全く同じ看板を使っている。しかも、32年前に開店したときから、看板はデーヴァナーガリー文字だ。他の州から移民してきて、ここでお金を稼ぎ、パンやバターを買っている。だから、看板にマラーティー語を書くくらいのことでもいい。それに、32年前、マハーラーシュトラの人たちは温かく迎えてくれた。本当はいい人たちだと思っている。ボンベイは自分の家みたいなもの。力づくで変えるのはよくないけど、そうじゃなければ問題ない。

ナヴィ・ムンバイの商人は、第一世代、もしくは何世代目かの移民で構成される。新規の移民が数世代にわたる居住者かにかかわらず、商人の語りからは、共通して、移民として「ビジネス」を展開していくための「ことなかれ主義」的な姿勢が窺える。反対意見を述べる人も、結局は移民してきた土地に適応しなければならないという結論を出している。これらは、「コスモポリタン」都市で生きるために必要な、一見矛盾するかにみえる、特定の「コミュニティ」への迎合的な態度²⁹だといえる。

²⁸ ヒンドゥー教徒の夫と結婚しているため、行政登録上はヒンドゥーである。

²⁹ ここで用いた「迎合」は、これも現地でよく使われる英単語「アジャスト(adjust)」[cf. Mehta 2004: 529-534]の訳語である。ニュアンスによって、「適応」、「調整」などの日本語も当てた。

一方、語り 1)で提示したように、商人たちのなかには、マラーティー語とヒンディー語をとくに区別していないようにみえる人も多かった。すでに述べたように、MNS の主張は、看板を英語やヒンディー語³⁰ではなく、マラーティー語化することであった。しかし、マラーティー語に使われるデーヴァナーガリー文字は、商店街の共通語であるヒンディー語をはじめとするサンスクリット語系の言語に共通する文字である。そして、店舗の名前は英語、あるいは神、店主の名前など固有名詞が多いため、表記をデーヴァナーガリー化することが、かならずしもマラーティー語化には繋がらない。したがって、「看板をヒンディー語にした」と語る人びとも多くいた。また、「ヒンディー語ならみんなが読める」(語り 1)、「英語(アルファベット)ならみんなが読める」(語り 2)という意見が、発言者が何語をしゃべるかとは関係なく、どちらも多く聞かれた。ここからは、言語的差異を具現化し政治利用しようとする MNS 側の意図と、現場の認識のズレが浮かび上がる。

聞き取りによると、ナヴィ・ムンバイにおける MNS の活動は、要求を記した手紙を配って歩くなど比較的穏やかなもので、商店への襲撃や暴動へは発展しなかった。これは、「ビジネスに忙しく」、「問題のないところに問題を作」る政治に関わってはられない(語り 5)と判断し、MNS の要求に従って迅速に看板を付け替えた商人たちの判断の成果かもしれない。こうした判断は、「ビジネスを優先する」という経済的理由で語られるが、語りからは「コスモポリタン」なムンバイの価値を重視する商人たちの論理が浮かびあがる。さまざまな「カースト」(語り 4, 5 点線部)が共存する都市において「コスモポリタン」であるためには、「ビジネス」を名目にした積極的な妥協や調整が必要とされるのだ。

3 移民商人間の差異

前述したように、今回の看板事件前後には、北インド人(UP 州とビハール州出身者)移民に対する暴動が起こった。これまで「移民商人」と一括りにして商店街における商人の論理を描こうとしてきたが、古くからボンベイでビジネス・コミュニティとしての地位を確立してきたグジャラート州やラージャスターン州出身の商人(当人が第一世代の移民である場合も含む)と、今回標的となった北インド人のあいだには、看板事件や極右政党への認識に差異がある。本節では、その差異に目を向ける。なお、本節でとりあげる会話は、滞在先家族との会話(英語)を除き、すべてヒンディー語で交わされた。

(1) ラージャスターン人とグジャラート人

「迎合」という日本語には卑屈な印象があるが、ここでは自らの置かれた状況や対峙する相手に対する的確な洞察にもとづき、対応の仕方や自分自身をも変えつつ現実を生成していく能動性をも含んだ態度としたい。

³⁰ MNS は、記者会見で英語メディアと共にヒンディー語メディアの取材陣を締めだしたり、2009 年には州議会においてヒンディー語で宣誓を行なった政治家を攻撃するなど、北インドの言語であるヒンディー語を敵視する行動が散見される。

まずは、1988年にムンバイに移民してきた宝石・ジュエリー店の店主(男性、ラージャスターン州出身、ヒンドゥー、ジェイン)の例を挙げたい。筆者が訪れるといつもチャイをくれた温和で物静かなこの宝石店主は、MNSには友人がたくさんいるとあって、いくつか名刺を取りだして見せてくれた。BJPとシヴ・セナーを支持しているという彼は、ジェインのビジネスマン仲間にBJPの支持者は多いという。マラーティー語の看板事件については、「MNSの主張は正しいが、暴力的なやり方はよくない」という。自らも移民であるのに、移民を排除するようなMNSの政策は不安ではないのか聞いたところ、「UPやビハールからは電車まるごと移民して来たり、移民の数が多すぎる。ラージャスターン人は長年ムンバイで働いてきた」と、北インド人の出稼ぎ労働者と彼らとの差異を主張する。彼は、自分たちがムンバイで排除や迫害の対象となるとは思っていないようだった。また、MNSは、BJP、そしてシヴ・セナーの延長と捉えられていた。

1984年からムンバイで働く食料品店主(男性、グジャラート州出身、ヒンドゥー、パテル)も、BJPを支持している。「国民会議派が政権をとってから、(彼が販売している)米や豆の値段が高騰した。BJPは経済政策に優れているので、BJPが政権をとったら食料品の値段はすぐに下がる。まわりのグジャラート人もみんなBJPを支持してる。なんといってもモーディー(グジャラート州知事、BJP)の州だから」。

彼のBJP支持には、ビジネス・コミュニティの成員としての、またグジャラート人としての自己認識が表明されていると考えられる。なお、MNSのラージ・タークレも、北インド人を攻撃するため、「マールワール人(現ラージャスターン州出身)とグジャラート人はマラーティー語を学ぶのに、バイヤーは学ばない」、「他の移民コミュニティはうまくやっているのに、北インド人はカルテルを作る」など、グジャラート人やラージャスターン人を擁護する発言を行なっている。

次に、ナヴィ・ムンバイの北インド人たちが、2008年の反北インド人キャンペーンをいかに生きぬいたのか、ふたつの事例から考察する。

(2) 北インド人：饒舌な迎合

八百屋はヴァシで北インド人の仕事とされているものの一つである。筆者の滞在先家族の母親は、北インド人は、彼らが食べないマハーラーシュトラ沿岸部の野菜を知らないから仕入れてこないと不満をもらす。しかし、彼女は特定の北インド人の八百屋にいつも野菜の配達を頼んでいる。配達してもらうためにはまとめ買いをする必要があり、割高になるが、買い物に行く手間が省けるし、その八百屋はいつも質のよい新鮮な野菜を届けてくれるからだという。筆者の調査項目を知っている彼女は、「MNSとか政治の話が聞きたいなら、あの『抜け目のないビジネスマン』に話を聞くべきよ」と強く勧めてきた。その八百屋は、配達に来るたびに政治の話を語り始めては止まらないのだという。

家族が配達を頼んでいる八百屋の店主は、40代の男性で、妻と息子とともに店舗を営ん

でいる。店の裏側にある CIDCO の分譲アパートに母と妻、息子、息子の妻と住んでいる。彼は、UP 州のアラーハーバード出身のヒンドゥーで、1973 年に初等教育 3 年を終えたとき、おじと一緒にナヴィ・ムンバイに出てきた。その後、露店で野菜を 20 年売って、5 年前に店を構えた。看板事件について聞くうちに、話は MNS の対北インド人暴動に及び、彼はおじの武勇伝として以下の逸話を披露してくれた。

2008 年にラージ・タークレーが捕まった時、野菜卸売市場でも暴動が起きた。MNS のメンバーが（北インド人を狙って）野菜を運ぶ四輪車を攻撃した。でもおじさんは助かったんだ。なぜなら、車に「マハーラーシュトラに勝利を」と書いていたからね！

深妙な面持ちで話を進めるものの、オチを言い終えるころには、体を動かして豪快に笑う。この手の話の語り方を心得ているようだ。つづいて彼は財布からひとつのカードを出して私たちにを見せてきた。それは、MNS の「プライマリー・メンバーズ ID」と呼ばれるもので、MNS の活動家が街角でメンバーを募集している際に申しこんだそうだ。メンバーになるには、カードに自筆で名前を書いて、小さい証明写真を貼るだけでよい。書類の記入などは必要なく、費用は 5～10 ルピーほどだったという。斜め上を向いたラージ・タークレーの写真が印刷されたカードには、会員番号、地区名が記されているほか、ふたつのスローガンが刻まれている。「私はマハーラーシュトラのもの、マハーラーシュトラはわたしのもの！」、「マラーター³¹の団結を。マハーラーシュトラ・ダルマの繁栄を」。彼は、またにやにや笑いながら、「私は MNS が恐ろしいからねえ。いざとなったらこのカードを見せるのだ」と語った。MNS のプライマリー・メンバーになったとはいえ、彼は、選挙ではずっと国民会議派に投票している。理由はガンディーがインドを独立に導いたからだという。

(3) 北インド人：口をつぐむ人

次に、別の北インド人の例を紹介したい。UP 出身のあるスナック売りの男性は、自転車にスナックや揚げ菓子が入った袋を積んで売り歩く仕事をしている。筆者の滞在先の家族の話では、彼はヴァシで 10 数年うまくスナック販売業をしてきたのに、MNS の活動によって反北インド人ムードが高まった当時、さまざまな嫌がらせを受けたという。滞在先家族はこの人物から毎週スナックを買っていたが、2008 年の一時期は、街中での嫌がらせがひどく、彼は商売を中断せざるをえなかった。家から出たらすぐ、子どもの集団がスナ

³¹ マラーターは、狭義には王侯、地主を中心としたマラーター・カーストを、広義にはマラーティー語を母語とする人びと(本稿ではマハーラーシュトラ人)を指す。ここではカーストではなく、広くマハーラーシュトラ人の団結、マハーラーシュトラ人としてのあり方の繁栄を呼びかけていると考えられる。

ック売りを囲み「バイヤー、バイヤー」とはやしたてる。そのうち 10 代の青年たちも集まってきて、何かあげるまで離れない。あげるのは 30 ルピーくらいのお金か、小さなスナックなどである。しかし、ひとつの集団が離れたら、また次の集団がやってくる。こうした苦労をスナック購入客であるこの家族に語っていたそうだ。

「当時の話を聞いてみたら？」と勧められ、スナックを売りにきた彼に数回聞き取りをした。このスナック売りは、UP 州ジョンプール出身のヒンドゥーで、1998 年にムンバイに移り、今はナヴィ・ムンバイのスラム地区、トゥルベに、妻と息子二人娘一人と住んでいる。毎朝、電車でムンバイ市のマトゥンガの卸売り商(タミル・ナードゥ州出身)へスナックを仕入れに行き、その後トゥルベから自転車でヴァシに来て、各家庭を回ってスナックを売る。トゥルベ在住である数人の UP の同村出身者と一緒に仕事をしている。

しかし彼は、2008 年の嫌がらせについては、「何もなかった」と口をつぐんだ。彼が話してくれたのは、5 年前に起こったという窃盗事件のみである。5 年前、自転車でスナックを売りに出ていたら、3 人の 20 代くらいの男たちが彼の自転車を止めて、目隠しをし、シャツの胸ポケットから 70 ルピーを奪っていった。10 年来、「問題」があったのはこの 1 回だけで、これは政治団体とは関係ないものだったという。

MNS による反北インド人キャンペーンによる影響を聞いてみたところ、ヴァシは安全だという答えが返ってきた。「トゥルベには他の UP 出身者、マハーラーシュトラ人、カナダ人などが一緒に同じ地区に住んでいる。不安はない」との返事だった。

彼が以前、スナック販売先の家庭で何度も語ったという嫌がらせの話をしなかったのは、筆者への信頼がなかったからかもしれない。もしくは、同じトゥルベ在住の新しいメイドの存在が気になったのかもしれない。しかし、いずれにしろ彼は、2008 年の話を蒸しかえずことを避け、異なるコミュニティが共存する平和なヴァシという語りを選んだ³²。

以上、グジャラート州やラージャスターン州からの移民と、今回 MNS の標的となった北インド移民とのコミュニティ間における差異を示す事例をみてきた。ナヴィ・ムンバイでは北インド人に対する暴行などは報じられておらず比較的平和だったとはいえ、日常生活のレベルではさまざまな不都合や恐怖を覚える出来事があったと考えられる。事例に示したふたりの北インド人は、不利な立場に置かれた人々の対照的な例であり、一方は自らの生存戦略としての迎合を饒舌に語り、一方はさまざまなコミュニティの共存という「コスモポリタン」なムンバイを神話的に語っている。これは、彼らの現実への適応の仕方でもあり、自らが生きていく現実を生成していく過程でもあると考えられる。

IV 都市祭礼を支えるもの：ガネーシャ祭を事例に

³² 彼も(2)の八百屋も、「政治的」な語りを面白い顧客(筆者の滞在先家族)の需要を察知し、サービスの一環として相手に喜ばれる語りを提供したとも考えられる。これも、商人たちによる現実適応/生成(「アジャスト」注 29 参照)のひとつのモードといえるだろう。

本章では、商店街の一大イベントであるガネーシャ祭を事例に、商店街の協力関係とそこでの「ビジネス」の論理を考察する。

インドにおける都市祭礼は、コミュニティや社会空間の枠組みを示唆するものとして議論されてきた[e.g. Masselos 1991]。過去数十年における都市祭礼の組織化や拡大は、極右政党による支援と彼らの支持層拡大戦略に関連づけられてきた。とくにシヴ・セナーはガネーシャ祭の組織化に力を入れ、スラムを活動の拠点とし、「暴力・奉仕・祭り」を補完的に組織化することで、貧しい若者たちを取り込んできたとされる[竹中 2001]。一方、カウルは、公的領域でのヒンドゥー神の使用を安易にヒンドゥットワやコミュニズムの実践に結びつける研究傾向を批判する。彼女は、ガネーシャ祭は BJP やシヴ・セナーのヒンドゥー・ナショナリズム勢力のみならず、国民会議派やムスリムにとっても重要な政治／文化の競合の場となるという[Kaur 2005]。しかし、祭礼に参加する人々は、マハーラーシュトラ人やヒンドゥーとしてのアイデンティティに自らを重ねているのだろうか。もしくは、それとは異なる自らの政治的立場の表明の場として流用しているのだろうか。以上の問いを考えるため、本章では、ガネーシャ祭を事例とし、その概要とマハーラーシュトラ人が果たす役割を記述する。次に、商店街における祭礼を支える商人の寄付金の動きに焦点をあてることで、商人たちの祭礼への関わり方を考察する。

1 ガネーシャ祭の概要

ガネーシャは、人間の体と象の頭を持つヒンドゥーの神であり、マハーラーシュトラ州ではガナパティ(シヴァ神に仕える神群の長)の名で親しまれている。もともとは土俗神であり、後代に正統ヒンドゥーのシヴァ神話と関連づけられた比較的新しい神であるとされる[上村 2003]。お腹が丸々と太り、お菓子が大好きで、乗り物は小さな鼠であるというユニークで愛嬌のあるガネーシャは、人びとに人気の神である。

13世紀以降、インド西部においては、ヒンドゥー暦におけるバードラパド月(8月から9月)の4日目をガネーシャ・チャトゥルティーとし、家庭にガネーシャの像を祀り、10日後の満月の日に川へ流す儀礼を通してガネーシャ祭を祝ってきた[小磯 1991]。現在のムンバイでは、ガネーシャ・チャトゥルティーにガネーシャ像が家庭や公共の展示場に設置されてから、水辺へガネーシャを沈水(visarjan)するのは1日、1.5日、5日、7日、11日目と家庭や団体の事情によって異なる³³。ただし、後述する公共ガネーシャ展示場では、11日目の沈水行列がもっとも盛大に祝われる。従来、家庭儀礼であったガネーシャ祭を現在の都市祭礼へと変貌させたのは、イギリス植民地政府に対して民衆運動を組織したB.G. ティラクである。ティラクは、ヒンドゥー・コミュニティ(とくにマハーラーシュト

³³ 家族単位の祭礼においてガネーシャ祭期間中に親族が集まれるよう沈水までの期間を長くしたり、逆に学校などで予算削減のため期間を短くしたりする事例があった。

ラ人)の統一を目的に、ガネーシャ祭を「公共の(sarvajanik/public³⁴)祭礼」として組織化した。1890年代初頭にティラクが提唱した新しいガネーシャ祭には、地域ごとにお金を寄付して公共のガネーシャ像を展示場に設置することや、ガネーシャの沈水時に歌や踊りを交えた見世物的な行列を作ることなど、現代に見られる様式が盛り込まれていた。この沈水時の行列は、ヒンドゥーにも人気のあったムスリムの祭礼ムハッラムを模倣したもので、ヒンドゥーがムハッラムの行進に参加するのをやめさせることを目的に、ガネーシャ祭に取り込まれたという[Masselos 1991; Kidambi 2007]。

ガネーシャ祭の数ヶ月前になると、警察や地方行政官、公共ガネーシャ祭委員会³⁵代表者の会議が開催され、公共ガネーシャ展示場設置や最終行列のルート認定、行事の内容などが確認される[Kaur 2005]。ガネーシャ沈水時のパレードには、巨大なガネーシャ像とスピーカーを積んだトラックが何台も街へ繰りだし、スピーカーから流れるボリウッド音楽や楽団のドラム演奏にあわせて激しく踊る人々が通りを埋め尽くし、あちこちからガネーシャ神を讃える「ガナパティ・バツパ・モーリヤ」という掛け声が上がり、街を挙げてのお祭り騒ぎとなる。

2 祭礼の準備

ガネーシャ祭の1ヶ月前になると、街中に複数の仮設ガネーシャ販売場が現れる。ガネーシャ像の販売に関わっているのはおもにマハーラーシュトラ人であり、マラーター・カーストが最も多く(8名)³⁶、新仏教徒(3名)を含むOBCに属する人々(計7名)の割合も高い。祭礼期間中以外の職業は、教師、会社員、学生、リキシャ運転手、露店商人など多様である。ガネーシャ像は、小さいもので高さ20cm(150ルピー)くらいから、1メートルを超える7,000-8,000ルピーのものまである。購入されたガネーシャ像は、家庭、アパートの共有部分、あるいはセクターごとの委員会の展示場において祀られる。

マハーラーシュトラ人を委員長とする、2009年に設立25周年を迎えたセクター17の公共ガネーシャ委員会の展示場は、毎年商店街の路上の一角に作られる。展示場の工事を請け負うのは結婚式場の設営などを行うインテリアと装飾の会社で、この会社は過去15年間同セクターの展示場を建設している。30-40名ほどの作業員も多くがムンバイ出身のマハーラーシュトラ人である。建設工事は1ヵ月半ほど前から開始し、祭の開始日から沈水

³⁴ Sarvajanik とは、サンスクリット語起源の言葉で、ヒンディー語、マラーティー語などにおいて「公共の」「一般的な」などを意味する形容詞である。現地で聞いた説明によると、sarva が「すべての」という意味で、janik は「人びと(people)」を意味する。ただし、同じく「人びと」を意味する log という言葉が「大衆(mass)」というニュアンスを含むのに対し、janik は「市民(citizen)」に近いという。

³⁵ 「公共ガネーシャ祭委員会(Sarvajanik Ganesh Utsav Mandal)」は、地区やセクターごとに作られる。2000年にはマハーラーシュトラ州に約4万の委員会があった[Kaur 2005]。

³⁶ ヴァシにおけるガネーシャ像販売場5店舗、18名の調査による。

パレードまで展示場を公開する³⁷。完成した展示場の外壁は、金メッキで覆われている。スピーカーから大音響でガネーシャを讃える音楽が流れる展示場内部に入ると、天井には複数のシャンデリアが輝き、内壁には赤いカーテンのあいだを彫刻が施された金色の柱が並び、両端に人工の小川が流れる。正面には大小のガネーシャ像が設置され、その左側にシヴァージー、右側にティラクの金箔の胸像が飾られている³⁸。祭礼期間中は展示場の外に長い列が作られ、多くの人々が展示場を訪れる。展示場のまわりや街中の道路には、ガネーシャ委員会や地元の各政党、大型店舗などの広告看板やバナーが数多く出現する。こうした広告収入も、委員会の重要な資金源のひとつである[Kaur 2005]。

以上のように、ガネーシャ像の販売、展示場の建設、主催委員会はおもにマハーラーシュートラ人で組織されている。しかし、マハーラーシュートラ人以外の多数の商人たちも祭礼への寄付や参加を行なっている。こうした商人たちと祭礼との関係を次にみていきたい。

3 商人たちの寄付と参加

商店街では、展示場建設などのために、委員会が寄付金を集める。各商店は、自分の店舗や家があるセクターのみならず、知り合いの店や以前住んでいた場所のあるセクター、常連客の地域や団体の委員会にも寄付をする必要がある。表3は、各店舗において寄付をする祭礼の種類である。調査時期がガネーシャ祭期間中だったこともあるが、すべての店舗がガネーシャ祭へ寄付をすると答えており、ここからガネーシャ祭の重要性が窺える。

表3：各店舗が寄付をする祭礼

祭礼名	店舗(件)	店舗(%)	1 店舗平均寄付金 (ルピー) ³⁹
ガネーシャ祭	54	100	2,970
ナヴラートリー	30	56	2,098
クリシュナ生誕日	10	19	1,989
アンベードカル生誕日	7	13	329
シヴァージー生誕日	5	9	425
ホーリー	4	7	888
ダシャーラー	2	4	50

³⁷ 2009年の祭りの開始日、ガネーシャ・チャトゥルーティーは8月23日で、11日目である公共展示場の沈水の日は9月3日であった。

³⁸ この展示場にかかる費用は、装飾に60万ルピー、柱などの構造、噴水、照明などに70万ルピー、合計120万ルピーくらいだという。

³⁹ 各店舗の回答金額は、すべての寄付先を把握しておらず、金額を覚えていない店舗が多かったため、実際よりかなり少ないと考えられる。なお、参考までに、調査商店街での従業員の月収の平均は、約4,800ルピーである。

独立記念日	2	4	251
ラクシャ・バンダン	1	2	1,000
ディーワーリー	1	2	5,000
ラマザン	1	2	無回答

(回答店舗数 54、複数回答含む)

調査地区では、ヒンドゥーの一部とみなされる新仏教徒やジャイナ教徒は積極的にガネーシャ祭礼に参加していた。また、ムスリムの店主や従業員も、ガネーシャ祭に関連する地区の行事に参加する様子が観察できた。これは、たんに寄付金を出すのみならず、ガネーシャ展示場を見学したり、イベント時に給水活動を手伝ったりという行為も含む⁴⁰。

あるムスリムの理容師は、セクター17の公共ガネーシャ祭委員会が設置したガネーシャ展示場に友人と遊びに行くと話してくれた。委員会に寄付した店舗の従業員には、行列に並ばなくても見学できる券が配られるから、その特典を利用するのだという。ちょうどラマザン(断食月)中だったので、展示場で配られるプラサード(ヒンドゥー神への供物のお下がり)で聖なる食べ物)は、日中は食べないが、日が暮れてからならもらって食べるということだった。

セクター6では、商店街の店舗がお金を出しあい、沈水時パレードで神像を水辺に運ぶガネーシャ信者たちに、ジュースや水を無料で配布する活動を行っていた。当日、給水ブースを訪れた筆者は、以前店舗でインタビューをしたムスリムのギフト・ショップ店主が給水活動に参加しているところに遭遇した。そこでの会話(英語)を紹介したい。

筆者：「お仕事されてるんですね。」

ムスリム店主：「ガネーシャ祭はコスモポリタンな祭だから、あらゆるコミュニティが参加しているんだ。」

筆者：「ムスリムもですか？」

ムスリム店主：「いや、ムスリムは今ラマザン中だからねえ…。でも、自分はここに店を持ってるから、こうして今日もずっと手伝っていたんだ。」

⁴⁰ マセロス は、新聞記事などのデータから、19世紀後半のボンベイにおいて、とくに商人たちの間で、ディーワーリーに代表されるヒンドゥーの祭礼は、ヒンドゥーにかぎらず、ムスリム、パールシー、キリスト教徒、ユダヤ教徒によっても祝われてきたと記す[Masselos 1991]。ヒンドゥー以外の人びと、特にムスリムがガネーシャ祭に参加するという逸話は、今日の新聞などメディアによっても、コスモポリタンなボンベイの事例として好んで取りあげられる。一方、ヴォラとパルシカルは、新仏教徒たち(元ダリット)が、ガネーシャ祭やナヴラトリーを「宗教的」祭礼ではなく「文化的」行事だとして参加してきたことが、ダリットの政治闘争のイデオロギー的洗練を困難にしたと述べている[Vora and Palshikar 2003]。

前節までにみてきたように、ガネーシャ祭を実際に組織する人々はマハーラーシュトラ人が多数である。しかし、ガネーシャ祭は「すべての人のための祭」という説明は、さまざまなコミュニティに属する商人たちの間でも共有されている。上述したムスリム店主も、まず「コスモポリタンであらゆるコミュニティが参加するガネーシャ祭」という公式的な説明をして、その後、それでも一般的にラマザーンのこの時期にムスリムが積極的にヒンドゥーの祭礼に参加することはないことをほのめかし、最後に、それでも自分は商店街のメンバーであることを優先して行事の手伝いをしていると語っている。これは少数派ムスリムが主流派ヒンドゥーにやむをえず従っているとも解釈できるかもしれない。しかし、ガネーシャ祭を「コスモポリタンな祭」だというムスリム商人の語り口からは、彼がむしろ積極的に「コスモポリタン」として、商人コミュニティの一員として祭礼に協力しているという姿勢が感じられた。これは、受け手(筆者)が望むだろうと考えた「コスモポリタン」イメージを、商人がパフォーマンス的に実践している例ともいえるだろう。

次に、商人たちにとって祭礼への寄付とはいかなるものなのかを語りからみていきたい。今回の調査では、当初、店主の祭礼組織への帰属状況について把握するきっかけとして店主が寄付する組織を尋ねた。しかし、「どの組織に寄付しますか？」という筆者の質問に対して、集金担当者の顔は知っていても、組織の名前を知らないと答える人が多かった。また、自分から寄付する組織を選ぶのではなく、寄付金を回収しに来た人には組織や祭礼の種類に関係なくお金を渡すという答えが多数返ってきた。「寄付してるんじゃない、誰かが勝手に来てお金をもっていくんだ」という説明は一般的であった。ここから、「自分で選んだ特定の組織に帰属し、寄付する」という図式は成り立たないことがわかる。

さらに、公共ガネーシャ祭委員会の資金の用途について懐疑的な声も少なくない。ある衣料品店の店主(男性、マディヤ・プラデーシュ州出身、ヒンドゥー、ジェイン・グジャラーティ・カッチ、英語)は「インドでは神様の名の下に何でも行なわれる」といい、ガネーシャ祭の委員について冗談交じりに「あいつらはマフィアみたいなものだ。委員になったら、寄付金の半分は懐に入れられる。そして、一度手にした椅子は決して手放さない」と語った。それでも寄付をするのは「ここで生活していくためには、お金を払って、あとなるべく関わらないようにするしかない」からだという。

サリーの生地屋の店主(男性、グジャラート州カッチ地方出身、ヒンドゥー、クンビ・パテル、ヒンディー語)は、筆者の調査に協力していることを喩えとして、祭礼への寄付を説明した。「インドの祭りなら、何にでも寄付する。いちいち誰にいくらあげたかは覚えていない。あなたの質問に今答えているのも同じこと。欲しいものがある人には、あげたらその相手が喜ぶのなら、あげる」。ちょうどこの話を聞いているとき、店に物乞いが来て、店主が小銭をあげていた。物乞いにお金を渡すことは小売店では日常的な行為であり、調査中にこうした場面によく遭遇した。物乞いにお金を渡す行為にも、祭礼への寄付と共通する「来るものには与える」という意識が窺える。

こうした寄付に対する認識は、祭礼に対してだけではなく、孤児や貧しい人々のための慈善活動や、政治活動にも共通している。既製服店の店主(男性、デリー出身、ヒンドゥー、マールワリー・アガルワール、英語)は、ヒンドゥー・ナショナリズムを掲げる BJP やシヴ・セナー、世俗主義の国民会議派など、政党に関係なく、知り合いが寄付金を募りに来たら寄付すると話した。あらゆる権力に従うのも、「ビジネス」の一部だからだという。お金を集めに来る人に「おじさん(uncle)⁴¹、いつもこの店で買い物してるんだから」と言われると、寄付するしかない。彼は、こういうお金を「ノー・ハラスメント・チャージ(嫌がらせ防止経費)」と呼んでいる、という。

以上、祭礼に関わる人びとの寄付行動や語りをみてきた。本章では、先行研究で指摘されたようなアイデンティティの政治への取り込み[竹中 2003]や、異なる政治的立場の競合の場[Kaur 2005]としてではなく、「コスモポリタン」な行事として祭礼に参加する人びと、また政治よりも「ビジネス」の論理を優先して祭礼を支える人々の姿が示された。

V おわりに

本稿では、看板事件と都市祭礼の調査報告を通じて、商人たちの「ビジネス」の論理について、さらには「コスモポリタン」という概念について考察することを試みた。ここで、本稿の論点を振りかえっておきたい。一点目は、先行研究におけるコスモポリタン都市の言説とコスモポリタン喪失論に疑問を提示し、現在のナヴィ・ムンバイにおけるローカルな「コスモポリタン」について検討する必要性を示した。本文でみてきたように、重層的で流動的なコミュニティを核とする都市社会において、実際にはコミュニティ間の差異や格差、権力への迎合があるなかで、商人たちは「ビジネス」の論理を優先させることで現実に適応し、都市生活上での均衡を保ってきた。二点目の試みは、分析枠組みの焦点を「政治」から「ビジネス」に変えることだった。本文で論じた政治的事件と宗教行事のいずれにおいても、ヒンドゥー化や地域主義化とされる現象に関わっている人びとは、かならずしも政治団体等のイデオロギーに回収されたり、確固たるアイデンティティを求めたりしているわけではなかった。むしろ、商人たちは「ビジネス」の論理を根拠に、地域主義的現象に参加していた。また、ここでいう「ビジネス」の論理には、商人として経済的な利益を追求することのみならず、さまざまなコミュニティが共存するコスモポリタン都市で生きるための「美学」ともいえる規範が見うけられた。

今後は、長期的な現地調査を通じて、現地で決まり文句として用いられる「ビジネス」という語の使われ方や文脈、内容を検討することで、本稿で便宜的に「ビジネスの『論理』」として提起した考え方の体系について考察を発展させていくことを課題としたい。

⁴¹ ムンバイでは、ヒンディー語やマラーティー語会話においても、店の男性店主や従業員への呼びかけに、英語の *uncle* が一般的に使われる。女性には *aunty* (aunty)。

参考文献

上村 勝彦

2003 『インド神話：マハーバーラタの神々』 筑摩書房。

応地 利明

1992 「マハーラーシュトラ[州]」『南アジアを知る事典』 辛島昇他（監修）、pp.698-699、平凡社。

押川 文子

1992 「留保制度」『南アジアを知る事典』 辛島昇他（監修）、p.776-777、平凡社。

小磯 学

1991 「ガネーシャ神のいる街」『都市の顔・インドのたび』 坂田貞二、内藤雅雄、臼田雅之、高橋孝信（編）、pp.91-95、春秋社。

竹中 千春

2001 「暴動の政治過程：1992-93年ボンベイ暴動」『民族共存の条件(学会年報第3号)』、日本比較政治学会(編)、pp.49-78、早稲田大学出版部。

田辺 明生

2008 「民主主義：ばらばらで一緒に生きるために」『人類学で世界をみる：医療・生活・政治・経済』 春日直樹（編）、pp.205-224、ミネルヴァ書房。

デュモン、ルイ

2001 『ホモ・ヒエラルキクス：カースト体系とその意味』 田中雅一・渡辺公三共訳、みすず書房。

内藤 雅雄

1992 「シヴァージー」『南アジアを知る事典』 辛島昇他（監修）、p.302、平凡社。

中島 岳志

2005 『ナショナリズムと宗教：現代インドのヒンドゥー・ナショナリズム運動』 春風社。

藤井毅

2007 『インド社会とカースト(世界史リブレット 86)』 山川出版社。

Appadurai, Arjun

2000 Spectral Housing and Urban Cleansing: Notes on Millennial Mumbai. *Public Culture* 12(3): 627-651.

Bayly, Susan

1999 *Caste, Society and Politics in India: From the Eighteenth Century to the Modern Age* (The New Cambridge History of India. IV.3). Cambridge: Cambridge University Press.

Conlon, Frank

- 1995 Dining Out in Bombay. In *Consuming Modernity: Public Culture in a South Asian World*. Carol Breckenridge (ed.)pp. 90–127. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Clifford, James
- 1997 *Routes: Travel and Translation in the Late Twentieth Century*. Cambridge: Harvard University. (2002 毛利嘉孝他訳『ルーツ——20世紀後期の旅と翻訳』月曜社。)
- Kaur, Raminder
- 2005 *Performative Politics and the Cultures of Hinduism: Public Use of Religion in Western India* (Anthem South Asian Studies). London: Anthem Press.
- Kidambi, Prashant
- 2007 *The Making of an Indian Metropolis: Colonial Governance and Public Culture in Bombay, 1890–1920* (Historical Urban Studies). Hampshire: Ashgate.
- Lele, Jayant
- 1996 Saffronization of the Shiv Sena: The Political Economy of City, State and Nation. In *Bombay: Metaphor for Modern India*. Patel, Sujata and Thorner, Alice (eds.), pp. 186–200. New Delhi: Oxford University Press.
- Markovits, Claude
- 2008 *Merchants, Traders, Entrepreneurs: Indian Business in the Colonial Era*. London: Palgrave MacMillan.
- Masselos, Jim
- 1991 Appropriating Urban Space: Social Constructs of Bombay in the Time of the Raj. *South Asia* 14(1): 33-63.
- Mehta, Suketu
- 2004 *Maximum City: Bombay Lost and Found*. New Delhi: Penguin Books India.
- Meyer, Birgit and Peter Geschiere
- 2003 Introduction. In *Globalization and Identity: Dialectics of Flow and Closure*. Meyer, Birgit and Peter Geschiere(eds.): pp. 1–15. Oxford: Blackwell.
- Patel, Sujata
- 2003 Bombay and Mumbai: Identities, Politics, and Populism. In *Bombay and Mumbai: the City in Transition*. Patel, Sujata and Jim Masselos(eds.): pp. 3–30. New Delhi: Oxford University Press.
- Pollock, Sheldon, Homi K. Bhabha, Carol A. Breckenridge, and Dipesh Chakrabarty.
- 2000 Cosmopolitanisms. *Public Culture*. 12(3): 577–589. Duke University Press.
- Punwani, Jyoti

2003 'My Area, Your Area': How Riots Changed the City. In *Bombay and Mumbai: the City in Transition*. Patel, Sujata and Jim Masselos (eds.): pp. 235–264. New Delhi: Oxford University Press.

Sharma, R.N. and K. Sita (eds.)

2001 *Issues in Urban Development: A Case Study of Navi Mumbai*. Jaipur and New Delhi: Rawat Publications.

Thorner, Alice

1995 Bombay: Diversity and Exchange. In *Bombay: Mosaic of Modern Culture*. Patel, Sujata and Alice Thorner. (eds.): pp. xiii–xxxv. New Delhi: Oxford University Press.

Vora, Rajendra and Suhas Palshikar

2003 Politics of Locality, Community, and Marginalization. In *Bombay and Mumbai: the City in Transition*. Patel, Sujata and Jim Masselos (eds.): pp. 161–182. New Delhi: Oxford University Press.

参照ウェブサイト

Appadurai, Arjun

2008 Is Mumbai's resilience endlessly renewable? *The Immanent Frame*. URL: <http://blogs.ssrc.org/tif/2008/12/07/is-mumbais-resilience-endlessly-renewable/> — 2010年1月31日閲覧。

CIDCO

2005 Socio Economic Survey of Household in Planned Nodes in Navi Mumbai: Executive Summary. URL: <http://cidcoindia.com/cidco/studysurv.aspx> — 2009年12月23日閲覧。

Google maps

2010 ムンバイ、ナヴィ・ムンバイとマハーラーシュトラ州地図。URL: <http://maps.google.com/> — 2010年3月19日閲覧。

新聞記事

BBC News, South Asia

2008, Oct.21. "Riots over Indian Leader's Arrest."

http://news.bbc.co.uk/2/hi/south_asia/7681283.stm

2008, Oct.29. "Indian labourer killed on train."

http://news.bbc.co.uk/2/hi/south_asia/7699074.stm

Times of India, The

- 2008, Feb. 2. “Big B Draws Raj Thakeray's Ire over UP Interests.”
<http://timesofindia.indiatimes.com/india/Big-B-draws-Raj-Thakerays-ire-over-UP-interests/articleshow/2750611.cms>
- 2008, Feb. 3. “MNS activists clash with SP workers.”
<http://timesofindia.indiatimes.com/articleshow/2754225.cms>
- 2008, Feb. 4. “In Mumbai, north Indians attacked.”
<http://timesofindia.indiatimes.com/articleshow/2754238.cms>
- 2008, Feb. 13. “Raj Thackeray arrested, released on bail.”
<http://timesofindia.indiatimes.com/india/Raj-Thackeray-arrested-released-on-bail/articleshow/2780007.cms>
- 2008, Feb. 14. “Maha exodus: 10,000 north Indians flee in fear.”
<http://timesofindia.indiatimes.com/india/Maha-exodus-10000-north-Indians-flee-in-fear/articleshow/2780795.cms>
- 2008, Feb. 24. “25,000 North Indians leave Pune; realty projects hit.”
<http://timesofindia.indiatimes.com/india/25000-North-Indians-leave-Pune-realty-projects-hit/articleshow/2809937.cms>
- 2008, Aug. 13. “MNS diktat on Marathi signboards sparks panic.”
<http://timesofindia.indiatimes.com/city/mumbai/MNS-diktat-on-Marathi-signboards-sparks-panic/articleshow/3358728.cms>

(2010年3月17日採択決定)